

研究種目：若手研究(B)	
研究期間：2006～2008	
課題番号：18730323	
研究課題名（和文）	「戦争体験」を描く日本のポピュラー文化受容とナショナリズムをめぐる国際比較研究
研究課題名（英文）	International Comparative study on the Reception of Japanese popular-culture describing War Experience and Nationalism.
研究代表者	
	山中 千恵 (YAMANAKA CHIE)
	仁愛大学・人間学部・講師
	研究者番号：90397779

研究成果の概要：本研究を通じて日本の戦争体験を描いたマンガやアニメが受容される時、作品の評価や作品の読書・視聴体験が、かならずしも各国における戦争の記憶や日本の歴史的問題と直接的にむすびつけられて語られるわけではないということが明らかになった。語りは、受容された国におけるマンガ・アニメ文化の位置づけと、読者の「メディア体験史」との関係から、異なるやり方で歴史意識と接続される。以上の結果から、今後の研究において、個人の記憶と集合的記憶の間にメディア体験それ自体が生み出す記憶という中間領域を想定し、考察を進める必要があることがわかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	150,000	3,150,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：ポピュラー文化 グローバリゼーション 記憶 歴史意識

1. 研究開始当初の背景

近年、日本のアニメーションやマンガなどのポピュラー文化は、国内外を問わず、影響力を持ち始めている。研究開始当初、アカデミックな研究においてもこうした状況を無視することはできず、日本のポピュラー文化

の海外への浸透と受容状況を探ろうとする研究が増えはじめていた。

しかし、それらの研究は「日本の」と冠したポピュラー文化全般が、どのように各地域に浸透しているかを自画自賛的に描き出そうとする傾向をもっており、ともすれば日本のナショナリズムを強化する目的を持つこ

とが多かった。

一方こうした文化ナショナリズムを批判する文脈で、ポピュラー文化が取り扱われる例も増えていた。たとえば、『ゴーマニズム宣言』や『戦争論』で知られる小林よしのりの作品を、日本研究の一環として研究する動きは国内外に広がりつつあった（東アジア文史哲ネットワーク編 2001『小林よしのり＜台湾論＞を超えて』 作品社等）。

しかしこれらは、あくまでも小林の作品を生み出し受容する「日本の」状況に照準したものであり、ポピュラー文化の海外における受容という側面から批判を試みたものではない。

本研究は、こうした状況を越えて、日本のポピュラー文化が越境的なものであることを前提に、一国で完結し得ないナショナリズムの生成過程や、国家単位では読み解けない戦後という時空間を扱うために、あえて戦争批判を含んだ「日本」ポピュラー文化の海外における受容に着目するものとして着想された。

本申請者は、本研究に着手する以前から、社会学と地域研究との境界を研究領域として韓国を対象としたポピュラー文化研究を行っていた。特に、博士論文及びそれに至る研究において、越境するポピュラー文化とナショナリズムの関係を、植民地支配／被支配を経験した日韓の文脈から、質的調査の手法を用いてとらえようとしてきた。

それらの研究では、韓国において、主にく日本＞という他者のイメージが韓国のナショナリズムにとって重要な位置を占めていることがわかった。しかし、そのイメージは歴史的な文脈に基づき構成されているのだが、日本から輸入されたポピュラー文化の影響を無視できないことも確認できた。

以上を踏まえ、問題をより鮮明にとらえるために、課題申請にあたり、韓国だけに留まらず、ポピュラー文化の浸透がもたらす＜日本＞イメージの再構築とナショナリズムの関係を、敗戦や植民地というキーワードを共有する他の国や地域と比較していきたいと考えたのである。

2. 研究の目的

本研究は、日本の「戦争体験」をめぐる物語がポピュラー文化として流通し、越境して人々に受容されるとき、＜日本＞のナショナルな空間と歴史が、現地のナショナリズムによっていかに読み替えられ再構築されるのかという文化政治を、社会学的視点から明らかにしようとするものである。具体的な研究の目的は次のように設定した。

(1) 日本を含めた、韓国、台湾、ドイツ、フランスにおいて、日本人の戦争体験を描いた日本のアニメーションやマンガ作品（『はだしのゲン』など）が、読者レベルでどのように体験され読解されているのかを明らかにする。

(2) (1)および、各国、地域における評論や日本研究における作品の評価を、メディア史的手法を援用しつつふまえることで、作品の各国・地域における文化・社会的位置づけを明らかにする。

(3) 上記データを基に、日本における「戦争体験」をめぐる物語の国際的な位相を、ポピュラー文化の側面から探るとともに、各国・地域において、戦後日本という時空間がどのように構成されようとしているのかを検討する。

以上の目的をもつ本研究は、他研究との関係において次のように位置づけられる。

日本発のポピュラー文化の受容を扱った研究は、各地での日本製アニメやマンガの普及状況を報告するものが中心である（五十嵐暁郎編 1998『変容するアジアと日本』、浜野保樹 2005『模倣される日本』など）。地域文化研究へと発展させようとしたものには、石井による台湾分析、小針による韓国分析（石井健一編 2001『東アジアの日本大衆文化』）の例があるが、一地域を対象とするに留まっていた。

又、岩淵功一（2001『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店他）や毛利嘉孝（2004『日式韓流』せりか書房他）らは、越境するポピュラー文化をその政治性まで含めて扱おうとしているが、いまだ概論的なものであり、個別研究の深化が求められていた。

本研究は、これらの研究をより実証的な観点から補完・発展させ、理論的な進展に貢献するものとして位置づけられる。さらには、近年、海外における日本研究者も、日本のポピュラー文化のもつ影響力に注目しており、申請者はこうした要請にこたえる研究を行ってきた（yamanaka2002、2006 および山中他 2004）。このような傾向を踏まえ、国際的な日本学研究の要請にもこたえうるものを目指して、本研究の目的は設定されている。

3. 研究の方法

本研究は、韓国、台湾、ドイツ、フランスを中心に、「はだしのゲン」をはじめとした数点のマンガ作品に関する読者へのインタ

ビュー調査、調査対象者個人の日本ポピュラー文化体験史を聞く記述式の質問調査、当該作品の評価に関する雑誌・新聞記事の内容分析を用いて推進された。

具体的には、目的にあげた(1)を明らかにするために、主に、インタビューを用いたオーディエンス調査を行った。もともと国内で受容されることを前提に作られた戦争体験を扱う作品が、異なる文脈で誤読されるというオーディエンスの読みの多様性や、彼らの読みを方向づける社会的属性に配慮しながら、調査を進めた。また、オーディエンスがどのようなポピュラー文化体験のもとに対象作品を受容しているのかを理解するために、オーディエンスのポピュラー文化体験史を記述してもらう質問紙調査も行った。

目的(2)に関しては、作品論・テキスト研究にとどまらず、近年のメディア研究の成果を踏まえ、作品の文化・社会的位置づけにも着目するために、新聞や専門誌の評論を取り上げ、質的内容分析の手法を用いてアプローチすることとした。

本研究では、調査において協力者の反日感情に直面する可能性があった。この対応策としては、あらかじめ研究主旨を明らかにする文章を各国語で用意するとともに、問題が生じた際には、反発を生じた経緯を探り、調査計画にフィードバックするとともに、現地の研究者とともに調査協力者のケアにあたる準備をした。幸いにして、こうした問題を生じることなく、まずは調査を終了することができた。

4. 研究成果

本研究において、概要でも述べたとおり、日本の戦争体験を描いたマンガやアニメが受容されるとき、作品の評価や作品の読書・視聴体験が、かならずしも各国における戦争の記憶や日本の歴史的問題と直接的にむすびつけられて語られるわけではない、ということが明らかになった。語りは、受容された国におけるマンガ・アニメ文化の位置づけと、読者の「メディア体験史」との関係によって、異なるやり方で歴史意識と接続される。以上の結果から、今後の研究において、個人の記憶と集合的記憶の間に、メディア体験それ自体が生み出す記憶という中間領域を想定し、考察を進める必要があることがわかった。

また、本研究を通して、ドイツ・フランス・オーストラリアで開催されたシンポジウムで成果の一部を発表する機会を得、ディスカッションを行うなど、国外の研究者とのネットワークを形成・強化することができた。国

内においては、論文や書籍の形で成果物の一部を出版した。さらに、韓国でも一般向けのエッセイやウェブ記事を発表し、調査内容を一部フィードバックすることができたと考えている。今後も、本研究で培われた国際的ネットワークを維持発展させるとともに、内容の展開・発展を含めて、さまざまな形での公開と活用を図っていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5件)

- ① 山中千恵、「「ドラゴンボール」に出会った韓国」、『マンガの中の<他者>』伊藤公雄編、pp. 96-131、2008、査読無
- ② Chie Yamanaka. Manga, Manhwa and Historical Consciousness: Trans-national Popular Media and the Narrative De/Construction of Japanese-Korean History. Richter, Steffi, eds. Contested Views of a Common Past: Historical Revisionism in Contemporary East Asia. pp321-328. 2008. 査読無
- ③ Chie Yamanaka. Domesticating Manga? National identity in Korean comics culture. Jaqueline Berndt & Steffi Richter, eds. Reading Manga: Local and Global Perceptions of Japanese Comics. pp191-202. 2006. 査読無
- ④ 山中千恵、「読まれえない「体験」・越境できない「記憶」－韓国における『はだしのゲン』の受容をめぐる－」、『はだしのゲンのいた風景－マンガ・戦争・記憶』吉村和真・福間良明編・第8章、pp211-245、2006、査読無
- ⑤ 山中千恵、「「韓流」を語ることの現在」、『韓国朝鮮の文化と社会』、5号、pp133-144、2006、査読有

[学会発表] (計 1件)

- ① 山中千恵、「ポピュラー文化と歴史意識」、現代韓国朝鮮学会 第十回定例、2008年7月21日、同志社大学

[図書] (計 1件)

- ① 山中千恵 (他 共編著)、ミネルバ書房、『ポスト韓流のメディア社会学』、2007、268ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山中 千恵 (YAMANAKA CHIE)

仁愛大学・人間学部・講師

研究者番号：90397779